



「対馬市環境基本計画」～物語で描く島の将来環境像～

株式会社プレック研究所 辻阪吟子・村瀬俊幸・米塚佐世子

対馬市は、島の約90%が森林に覆われるなど豊かな自然に恵まれているとともに、古くからの大陸との交易による独自の歴史・文化に彩られた島である。しかし、一方で、高度経済成長による生活様式の変化、過疎化・高齢化の著しい進行等により、森林の荒廃や地域社会の衰退が問題となっている。このような中で、対馬市では、平成23年に、「今まで以上に森・川・里・海が連環し環境に配慮した持続可能な社会経済活動を推進するとともに、人とツシマヤマネコをはじめとする

野生動植物が共生できる島づくりを目指し」で環境基本条例を制定している。本業務は、この条例に基づいて、市の環境施策の基本となる環境基本計画を策定するものである。


私たちは、環境基本計画策定を、市民による環境まちづくりの第一歩と考え、目指すべき環境像（環境の将来像）を市民にいかにかわりやすく示し、共感が得られるかが重要と考えた。そこで、環境の将来像を物語風に描くという、物語計画手法を採用した。

2025年までに実現したい対馬の姿

対馬市の環境が抱える課題をどのように解決するのか
素晴らしい環境をどのように創っていくのか

市民・事業者・行政・滞在者のアクションプランとして取りまとめたものです。

対馬市環境基本計画に記した「アクション」を実行した場合、今から10年後、つまり、2025年ごろの対馬の環境は、どのようになっているのでしょうか。10年後の私たち自身に、未来の対馬の様子をインタビューしてみましょう！



森林組合のテツさん

そうやな～、

君たちがいる2013年頃は、「対馬市森林づくり基本計画」や「対馬市伐採ガイドライン」をつくって、なんとか森林の環境問題を解決しようと取り組み始めた頃やったね。


自分がこの10年間、特に力を入れてきたことは、森林の恵みを色んなかたちで、使っていくこと。従来のように建築材として使うことに加え、薪やチップにしてエネルギーに使ったり、広葉樹のほだ木でシイタケ栽培をしたり、あとは、森林セラピーって言って、疲れた心や身体を休める場所として使ったり。

森林資源を使うことで、森林の手入れが進むし、なによりも森林の価値をたくさんの人に知ってもらえるからね。森林って、宝の山なんだよ。

あと、2013年頃に大きい問題になったシカやイノシシは、毎年数千頭を駆除して皮革製品やジビエ料理にうまく使われとるよ。貴重な植物が生育しとるエリアを柵で囲って、シカやイノシシの食害から守る努力もしとるから、対馬の固有動植物も少しずつやけど増えてきてるよ。

森林づくりというのは、息の長い仕事やけ、すぐには良くならんもんね。あせらず一歩一歩やっていくしかないよ。今の努力が未来をつくるけ頑張ってくれんね！

2025年 森の姿



物語で描く島の環境の将来像—2025年森の姿（対馬市環境基本計画 概要版より）

作品概要

作品名：「対馬市環境基本計画」
 ～物語で描く島の将来環境像～
 対象地：長崎県対馬市
 発注：長崎県対馬市
 事業目的：対馬市環境基本条例に基づき、環境の保全及び創造に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るための基本的な計画として、環境基本計画を策定する。
 事業体制：株式会社ブレック研究所行政計画部
 事業期間：平成24年10月～平成25年3月
 事業規模：対馬市全域

作品評

この作品は、市の環境基本計画の内容について、市民アンケートや市民インタビューの結果から、「10年後の仮想市民の言葉で語る」という独創的な手法で、目指すべき将来像を描いたものである。方言も交えた市民の言葉で、イラストを多用して物語風に描かれた内容は、市民に親しみを持って迎えられ、理解されやすいものになったと考えられる。また、単に環境だけの問題ではなく、社会・経済的側面との両立の上で、姿を描いているため、受け入れやすいものとなった点が評価された。
 多くの環境基本計画は、行政計画の一環として行政内だけの資料となりがちで、なかなか一般化されにくいのが現状であるが、本成果は、これに対し、本文内も図版が多用され、解りやすく、親しみやすいように工夫されている。

物語計画手法においては、できるだけ市民自身の言葉で将来像を描くことを目指して、市民アンケートによって「残したい自然・風景」を調査するとともに、市民へのインタビュー調査を実施、そこで得られた言葉をもとに物語を作成した。インタビュー調査では、環境と社会・経済を一体的にとらえるという考え方の下に、特に生業、暮らしの面に着目、農業者、漁業者、観光業者、主婦、教育関係者等を中心に先導的な取組

を行っている市民10名のインタビューを行ったが、その成果が計画の骨格を形成するものとなった。

さらに、将来像を単に物語風に描くというだけでなく、10年後の市民へのインタビュー形式で構築する、これを計画の冒頭にプロローグとして位置付けるなどの工夫を行ったことで、市民に読まれる計画づくりが相当程度達成できたと考えている。



計画の考え方と施策



対馬の環境将来像全体イメージ図

